

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお問いに字数指定がある場合には、句読点なども一文字分に数えます。
 (設問の都合上、本文を一部改変しています。)

小学4年生のわたし(かな)は転校してきた田舎の町で咲子と出会う。その町にはおハルさんというおばあさんがひとり暮らしをしていて、子供たちに親しまれていたが、死刑囚のところに慰問活動に行っており、大人の中には気味悪く感じている人もいた。ある日、引き取り手のない死刑囚の遺骨を預かるため自宅に持ってきたおハルさんに出会い、咲子は死刑囚のことを「すごく悪いことをして死んだ人だ」と言ってしまう。後悔した咲子は翌日、かなを誘っておハルさんの家を訪ねて謝り、気にしないでよいと言われた。

「おハルさんは、どうして死刑囚の人に会ったり、手紙を書いたりしようと思ったんですか？」咲子ちゃんが訊いた。

「それはね……一緒に考えてみたかったからよ。生きるってどういうことなのか、死が決められてしまった後で何を考えるのか。何をしたらいいのか。でもね、最初は、そうね、そんなに深く考えたわけではなかったの。偶然知り合った人に、慰問の会を勧められて、もしかしら自分も何かの役に立てるんじゃないかなって思えたから、参加しただけなの」

「楽しい、ですか？」Aと訊いてみた。

「ええ、そうね、うれしい、って感じかしら。私が行くと、彼らにとでもうれしそうにしてもらえて、私もうれしくなれるの」

おハルさんは、優しい笑顔になった。

「ここで朝と夜、毎日お祈りさせてもらっているのよ。かわいいお嬢さんたちが二人も一緒に祈りしてくれたら、あの人もどんなにうれしいことかしら」

おハルさんは、透き通る淡い茶色の瞳をこちらにまっすぐに向けた。①私はこくりと唾を飲み込んで、はい、と答えた。

「私は、お祈り、は、しません」

とぎれとぎれに言う咲子ちゃんを振り返ってみると、目にたっぷりの涙をたたえていた。みずうみみたいだ、と思ったとたん、ぱたぱたぱたと瞳の上の涙が、こぼれ落ちた。

「ごめんなさい……」

咲子ちゃんが片手を目に当ててうつつむいた。おハルさんは咲子ちゃんの肩にやさしくてのひらを当て、いいのよ、と言った。

「咲子ちゃん、こちらこそ、ごめんなさいね。顔も見なかったの、名前も知らない人のために祈りだけお願いするなんて、無茶で、残酷なお願いだっただわよね。ごめんなさいね」

咲子ちゃんは、黙ってうつつむいたまま、首を振りつつ、涙の粒をちぎり落とした。咲子ちゃんはちゃんとできないと思ったものを、それを言うのがどんなに辛くてもちゃんと言って、えらいな、と思った。②そのことを、ちゃんとわかってくれるおハルさんも、すごいな、と思った。そして私は、ぜんぜんダメだな、と思った。

私も、ちよつといやだな、とは思ったのだ。死刑囚の人の骨が目の前であって、祭壇にまつられていて、生々しくて、でもどんな人なのか、どんな悪いことをしたのか、全然わからなくて、ただ、お祈りだけすることが、変な感じがしたのだ。だけど、おハルさんがお願ひすることだから、おハルさんの望み通りのことをして、いい子だっておハルさんに思ってもらいたかったのだと思う。自分、ただのいい子ぶりっこだと思う。

そんなことを思っていたら、私の目にもいつの間にか涙がたまってきて、ぱたぱたとこぼれ落ちた。立ったままうつつむいていると、肩になにかあたたかいものがふれた。

「かなちゃんも、ごめんなさいね」

おハルさんのひらが、私の肩にある。私は首を一回振って顔を上げ、白い布に包まれたお骨を見た。

「まあ、とにかく、二人ともここに座って。お願いだから、そんなに深刻にならないで。ね。冷たい麦茶でも飲みましょ」

おハルさんに促されて、テーブルの前の椅子にすわった。おハルさんは、黄色い小花の模様が散っているガラスのコップに麦茶を充たして、白いレースのコースターの上に置いた。こげ茶色の香ばしい麦茶がきんと冷えていて、とてもおいしかった。咲子ちゃんも黙って麦茶を飲んだ。やっと涙も止まったみたいだった。

「この人の名前を、教えてもらってもいいですか？」

私が言うと、咲子ちゃんが顔を上げて私とおハルさんの顔を交互に見た。Bと目を見開いている。

「かなちゃん、名前を、知りたい？」

「うん。名前がわかれば、この人、確かに生きていたんやなって、同じ人間やったんやなってわかる気がする」

「死刑囚って事は……、人を、殺したことがある人よ？」

「でも、名前があるって事は、生まれたときに、両親から付けてもらった名前があるんやってことで、ああこの人も昔は赤ちゃんやっ

たんやなって、思うことができるけん……」

「……昔、赤ちゃんだったことと、今、わたしが祈りするかどうかは、ぜんぜん別なことやと思う。だって、そのあとの、今までの時間のぜんぶが、あのお骨の中にももってるって、ことやけん。その時間の中には、この人に、ものすごく苦しめられた人がおるけん。命までなくしとる人がおるんやけん。大事な人を、この人のせいでなくした人がおるとよ」

「うん……」

咲子ちゃんの言っていることが胸にささった。そうだね、この人のこと、なにがあっても許さない、という人がいるとしたら、なんにも知らないでお祈りだけする私たちのことを、なんて思うだろう……。私が言葉につまんでいると、咲子ちゃんがゆっくりと口を開いた。

「でも、お祈りするかどうかは別として、この人の名前は、わたしも知りたいと思う。なに考えとったかも、ちょっと、知りたか」

「じゃあ、この人の名前を、紙に書くわね」

おハルさんは、白い紙と万年筆を取りだした。紙の上に、一人の男の人の名前が、おハルさんの文字で書かれた。私はその文字をじつと見つめた。咲子ちゃんも見つめている。喉がとてもかわいてきて、唾を飲み込もうとしたけど、唾も出てこなかった。

おハルさんが、名前の横に、なにか書きはじめた。

布団ふだんたたみ雑巾ざしんしぼり列れとす

「これは、なに？」

おハルさんに訊くと、この人が作った俳句よ、と答えた。

(中略)

「死刑囚には一人ずつ部屋があつて、毎日蒲団ふだんの上げ下ろしや部屋の掃除そうじ、雑巾ざしんがけも自分でやるの。この人は処刑の前にもいつもと同じことをして、それをこの世の最後の作業にしたのね」

私は自分と同じように死刑囚が蒲団を畳たたんでいるところを思い浮かべた。

「咲子ちゃん、かなちゃんは、この俳句で、どんなことを感じる？」

「この日、殺される、っていうのに、なんだか、落ち着いてるっていうか……。きちんとしていて、びっくり、しました」

私が、たとたと答えると、咲子ちゃんが、私もそう思います、と続けた。

「自分が死ぬ前に、自分がいた場所をきれいにしたかった、ということですね」

「そうよ。潔癖けつぺきなどところのある人だったの。最後に会ったときは、とてもおだやかな顔をしていたわ」

「みんな、そんなふうなんですか？」

「ええ、ほとんどの方が、運命を受け入れた、しずかな目をしていたわ」

(中略)

「冬晴れの天よつかまるものが無い」

おハルさんが、少し上を向いて口にした。

「それも、最後の俳句？」

「そうよ。別の人が残した、最後の作品よ。この句は、だいぶ前に教えてもらったのだけど、ずっと覚えているの。この人、ほんとはつかまるものを見つけて、生きていたかったんだって、心の奥おくで叫なんでいるような気がするの」

おハルさんが目を閉じて、手を合わせた。おハルさんは、つかまるものを全部なくしてしまった人のために、手をさし出してあげようとしているのだと思った。

私も目を閉じ、お骨に向けて手を合わせた。

「冬晴れの天よつかまるものが無い」

一度聞いただけで覚えてしまったその俳句を、小さな声でつぶやいてみた。広い空をなんにもつかまるものがないまま落ちていくような感じがおそってきて、くらくらした。

私は、目の前の白い布で包まれた箱の中に入っている、名前と俳句だけを知っている人の悲しいたましいが、空の上では、ただただ安心してほしいと思った。きれいな水色の空の上の白い雲のように、ふんわりとやすらかに浮かんでいてほしいと。

ずっと目を閉じていたので、咲子ちゃんもお祈りしていたのかどうかはわからない。どうしたのかは、自分からは訊かないようにしようと心の中で思った。

お祈りを済ませたあと、死刑囚の人が書き残した俳句を、おハルさんが知っているかぎり書き出して、どんな人が詠んだ俳句なのか、説明してくれた。もっとこの人たちの俳句が読みたいと言ったのは、咲子ちゃんだった。おハルさんの家を出て、二人は草地の木陰で、時間が経つのも忘れて、おハルさんに書いてもらった俳句の感想を話した。かなが言う。

「なんかすこいよね、この人たちの俳句って、そのときどんな気持ちだったか、だいたいわかるけん」

うん……、と小さく相づちを打ちながら、咲子ちゃんがおお向けになって空を見つめた。

「わたしね、おハルさんが死刑囚の人たちにかわいいクッションとか、おいしいお菓子とか作って、差し入れに持っていったる気持ちが、やっとわかってきた気がする」

私もおお向けになった。

「死刑囚の人って、^③死になさって裁判で決められて、そのこと受け入れて、自分は死ぬんだな、自分がしたこと死ぬしかないんだって頭の中では理解して、それで、覚悟してても、それでも、やっぱり生きていたいって思うんやろね。でも、そんなの誰にも言えなくて……。でも、おハルさんはそれを知っていて、生きていられるうちに、少しでも楽しい気持ちになれるものを持って行ってあげとるんやと思う」

「うん、それで、死刑囚の人も、残したいんやろね。自分が生きとったってこと」

「ちょっとだけでも残せるって思ったら、死ぬのが、楽になるのかな」

私は、咲子ちゃんの黒い瞳をじっと見つめた。

「……そう、なんだと思う……。でもさ、だいたいどうして決められるとやろう、その人が死んだほうがいい人かどうかって……」

咲子ちゃんがそう言ったあと、沈黙が続いた。「どうして決められるとやろう」という咲子ちゃんの問いに対する答えが、私には見づからなかった。

アブラゼミとクマゼミが競い合うように鳴いていて、鳴き声の伴奏をするように川の流れる音が聞こえていた。と、蝶々が私の鼻先にも止まろうと思ったのか、顔にふらふらと近づいてきた。

「わわわわわ」

あわてて蝶々を振り払うように起き上がった。

蝶々は風に乗るようにふわーと遠ざかり、草原の中へ消えていった。

(東直子『いと森の家』)

問一

線部①「私はごくりと唾を飲み込んで、はい、と答えた。」とありますが、このときの気持ちがあとで説明されています。かなの気持ちを本文に沿って六十文字以内でまとめなさい。

問二

線部②「そのことを、ちゃんとわかってくれる」とありますが、何を理解したのですか。その内容としてあてはまらないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア よく知らない死刑囚のために、自分と同じように祈りなさいと言うのは無理なこと。

イ 咲子は咲子なりによく考え、どうするべきか悩んで辛い思いをしているということ。

ウ 死刑囚の人の骨が目の前にあり、生々しくて怖いと感ずるのも無理はないということ。

エ 表面だけおハルさんの願ひ通りにするのは簡単だが、断るのには勇気がいるということ。

問三

A・B にあてはまる語として最もふさわしいものを次からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア いきいき イ きよとん ウ びっくり エ そのそ

オ ばちくり カ はきはき キ おずおず ク ぱっちり

問四

線部③「死になさって裁判で決められて」についてあとの問いに答えなさい。

(1) そのことについて咲子はどうの疑問を感じたのですか。それを書いた一文を探し、最初の三字を答えなさい。

(2) 咲子が(1)のように考えるまでにどのような気持ちの変化がありましたか。本文全体を時間の経過にしたがって百三十字以内でまとめなさい。

問五

本文の表現の説明としてふさわしいものを次から二つ選び、記号で答えなさい。

ア 死を前にしてとまどう死刑囚の気持ちだが、ていねいにくわしく説明されている。

イ 引用された俳句は、死刑囚の気持ちを咲子とかなに想像させる働きをしている。

ウ 読者に語りかけるような口調で、多くの人の共感を得るように書かれている。

エ 事実を順序立てて説明することで、読者が内容を理解しやすいように書かれている。

オ 登場人物の会話が多く用いられることで、それぞれの人が浮きぼりにされている。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお問いに字数指定がある場合には、句読点なども一文字分に数えます。
(設問の都合上、本文を一部改変しています。)

ここで質問です。親しい人の顔を思い起こしてみてください。
どんな顔が思い出されますか？
友達の笑った顔、先生の怒った顔……、思い出すのは、さまざまな表情がついた顔ではないでしょうか。逆にいえば、無表情の顔を思い出すのは難しいでしょう。

つまり親しい人の顔は、表情付きで覚えているのです。口を大きく開けて楽しそうに笑う友人、はにかみがちに笑う友人、それぞれがよく見せる表情で覚えています。

表情には、その人の人となりにより強くあらわれるのです。その人の顔とは、その人がよくする表情なのです。

ふだん元気でエネルギーに満ちて美しかった友達が、ふと見せるぼんやりした無表情の顔を見て、印象が全く違って驚いたことはないでしょうか。無表情の顔には、魅力も個性もそぎ落とされてしまった印象があるように思います。顔はつくりではなくて、表情なのです。それには表情をつくる筋肉の動きが大きく貢献しています。

もし、表情がつくれないうとしたら、どんな人生を送ることになるのでしょうか。実は、表情をつくることができなくなる病気があ

るのです。
表情をつくる筋肉を動かすことができなくなる、顔面麻痺は身近にもみられる病気です。片側の筋肉だけが麻痺することが多いため、表情をつくることは難儀は感じません。どちらかというと、*1口の開け閉じに不自由を感じ、満足にしゃべれないことと、食事の際に不便を感じました。しかしそれは自分の実感であって、周囲の印象はちよつと違うようでした。まったく気づかなかつたのですが、表情の少ない顔をしていることが、家族にはとても苦痛だったようなのです。

周囲の違和感、これが表情をなくしてしまつた時に起きる最大の問題なのです。



表情をなくすだけで、その人を取り巻く状況はがらりと変わります。なぜでしょうか。

脳の障害により、少しずつ運動機能が低下して、姿勢の維持や運動の速度調節がうまく行えなくなるパーキンソン病は、表情もとぼしくなることがわかっていきます。パーキンソン病はアルツハイマー病のように、老人では比較的身近な病気です。みなさんも、名前を聞いたことがあるかもしれません。

パーキンソン病では、進行するとベッドや車椅子での介助が必要な生活となります。身体が動かなくなることは大きなショックで、家族にも大きな負担となります。ですがそれ以上に、患者本人が無表情であることは、病人を支える家族に大きな壁として横たわるようなのです。

パーキンソン病患者は意図的に表情をつくることはできるのですが、瞬時でつくる意図しない表情の動きができなくなるのです。意図的な表情ができればじゅうぶんかと思うかもしれませんが、そうではないのです。意図しない表情がないとすると、その苦勞ははかりしれないものがあります。

それは、友達となにげない会話をするときにも、あてはまります。こうした隙に、周りを気にせずマイペースで一人喋りする人は少ないでしょう。楽しい会話のやりとりの背後には、微妙な表情のかけあいがあるのです。相手の微妙な表情の変化を見て、この話はこれ以上しない方がいいとか、この話は面白いから続けようと、話は進んでいくのです。もしそこにまったく表情の変化がないとしたら……なんとも話にくいことでしょう。

面白い話に思わず吹き出したり、嫌な話に思わず不愉快な顔をしたり、これらの表情は意図せずに[A]的に生じるもので、円滑なコミュニケーションをするためには必須なのです。①人と違和感なく会話が続けるのは、表情の*2リアクションがあるからこそなのです。表情をなくすと、味気ない人生を送らざるをえない可能性があるのです。

パーキンソン病の患者の場合、介護している周囲からすると、昔のように会話できないことは、なによりつらいことなのです。しかも自分が表情をつくるのができないだけでなく、他人の表情の認識も鈍るようなのです。自分が表情をつくらないと、[B]的な顔を想像しにくくなるといわれているのです。

自分が表情を失ったとき、周囲はどのように変わるのか、注意深く観察した人がいます。顔面神経麻痺で顔面筋のコントロールを失った元患者による報告です。

周囲は決して意地悪をしているわけではないのですが、表情の乏しい人には、イエスカノーで答えるような簡単な質問しかなく

なるといいいます。会話が成り立つような、広がりのある質問をしないというのです。これでは会話をしようとしても、どうにもなりません。

そもそも無表情とは、表情がないだけでなく、もっと*3 ネガティブな雰囲気をも出し出してしまうようなのです。こわばった顔は、本人はそう思っていないまでも、「イライラしていて不機嫌」なように見えてしまうのです。それだけでなく、「お前には興味ない」と言っているように、あるいは「私は鈍いし、退屈ですよ」と言っているように、とらえられてしまうといえます。無表情の顔でいると、その人の魅力すらも消え失せていくようで、結果として、近寄りたがる存在になってしまふのでしよう。

周囲の受け止め方がそんな感じだと、本人も周りへの興味を失うという悪循環に陥っていきます。そして内に閉じこもり、顔や世界から遠ざかって生きようとするようになってしまふということでした。

しかし②これらすべての状況は、顔面麻痺が消え、表情がよみがえると、消え去りました。すべてのことに関する興味や情熱までも、取り戻したように思えたそうです。

こうしたことから、表情がつかれないだけで、ひどい苦勞をすることがわかります。人との関係をつくるためには、表情を持つことが必須とされる*4 所以なのです。

表情がないと顔の魅力はなくなるといいましたが、それはなぜでしょうか。

表情の中では、笑顔が特に大切です。たくさんの人が並んでいる中で、笑顔は目に付きやすく、笑顔の顔は記憶されやすいといわれています。

それには脳の働きが関係しています。笑顔は、脳にとって報酬として働くというのです。笑顔の顔と名前との記憶には、金銭的な報酬をもらうときに活動する、*5 前頭葉にある*6 眼窩前頭皮質が、記憶にかかわる*7 海馬とともに働くのです。

笑顔が報酬となるのは、人の最大の特徴といえるものかもしれません。犬やイルカなど、動物に芸を教えこむ時のご褒美はえさとなりませんが、人では違います。もちろん人間でも、ご褒美にご馳走してもらうこともありませんが、その目的はご馳走よりも、周りにほめられることではないでしょうか。先生や両親などからほめられることが最高のご褒美(報酬)で、笑顔はその延長なのです。これは「^③社会的な報酬」と呼ばれます。見知らぬ人に電車で座席を譲ってあげたり、道を教えて喜ばれること、そこで見た笑顔もご褒美となるのです。

では、笑顔の逆は、なんでしょうか。怒った顔は、笑顔と同様に素早く認識されます。たくさん的人群集の中で怒っている顔を見つ

けたら、危険人物として近づかないことです。避けなくてはいけない危険人物を記憶することは、生き抜く上では大切なことだからです。

より[C]的な問題でいえば、近所でなんとなく不審な行動を取るような人、友達関係でも貸したお金が返ってこないような人、そんな油断のならない人物は後々損をこうむらないように、頭に入れておかねばなりません。そういうことから信頼感のない顔は、記憶しやすいといわれています。ただし、記憶する脳の仕組みが、笑顔とは違っています。顔や人物のネガティブな情報の処理や、社会的・精神的に傷つく感情の処理、そして罰の処理に参与するといわれる*8 島皮質と記憶にかかわる海馬との相互作用があるといわれています。損をしないように、脳が働いているかのようです。

自分の身体の一部であるはずの顔は、単なる身体の一部という枠をこえ、周囲の世界と自分とをつなぐ、パイプ役となっているようです。

(山口真美「自分の顔が好きですか?」)

(注) *1 口の開け閉じに不自由を感じ、満足にしゃべれないことと、食事の際に不便を感じました。作者は以前この病気にかかったことがある。

*2 リアクション：反応。

*3 ネガティブ：否定的。

*4 所以：理由。

*5 前頭葉、*6 眼窩前頭皮質、*7 海馬、*8 島皮質：いずれも脳の器官の一部。

問一 筆者は「顔」とはどのようなものと考えていますか。そのことを表している言葉としてふさわしいものを

より前の部分から漢字二字で書きぬきなさい。

☆

問二

A · B · C

にあてはまる語句の組み合わせとして最もふさわしいものを次から選び、記号で答えなさい。

ア	A	現実	B	友好	C	楽観
イ	A	楽観	B	自発	C	情動
ウ	A	自発	B	情動	C	現実
エ	A	楽観	B	結果	C	友好
オ	A	友好	B	楽観	C	現実
カ	A	情動	B	現実	C	結果

問三

線部①「人と違和感なく会話が続く」ためには、どのようなことが必要ですか。これより前の部分から十字で書きぬきなさい。

問四

線部②「これらすべての状況」とありますが、どのような状況ですか。七十字以上九十文字以内で説明しなさい。

問五

線部③「社会的な報酬」とはどのようなことですか。「褒美」という言葉は用いずに十五文字以上二十五文字以内で説明しなさい。

問六

次の文のうち、本文の内容と合っているものは「ア」、異なっているものは「イ」と答えなさい。

- (1) 親しい人の無表情な顔は、周囲に違和感を与えるものであり、しだいに周りの人がイライラしてしまう原因となる。
- (2) パーキンソン病の患者は意図しない表情も意図して作る表情もできないので、周囲との間に大きな壁をつくってしまう。
- (3) 表情があることにより、周りの人々との豊かな会話が楽しめ、張り合いのある生き方をするができる。
- (4) 笑顔だけではなく信頼感のない顔が記憶しやすいのは、損をすると脳が、人との付き合い方を学ぶからである。
- (5) 顔は自分の身体の一部ではあるが、周りの人々と自分が関係を築いていく上で、大切な仕事をになっている。

おわり

